氏名・(本籍地)	鈴　木　孝　典（東京都）
学位の種類	博士（人間学）
学位記の番号	甲第76号
学位授与の日付	平成23年3月15日
学位論文題目	**精神障害者グループホームにおける評価支援ツールの開発的研究**
論文審査委員	主査　石　川　到　覚
	副査　中　村　　敬
	副査　田　中　英　樹

鈴　木　孝　典氏　学位請求論文審査報告書

「精神障害者グループホームにおける評価支援ツールの開発的研究」

論文の内容の要旨

本課程博士論文は、欧米諸国において1960年代から地域生活支援システムの居住支援策であるグループホーム（以下、GH）が精神保健福祉施策の脱施設化に向け、優れたモデルとして世界的に普及する動向に着目し、GHにおける支援のための評価尺度を開発した基礎的な研究である。

我が国において2004年以降の精神保健福祉改革に向けた施策では、GHを居住支援策の柱として積極的に整備を推進している。精神に障がいのある人びとは、疾病と障がいを併せ持つ障害特性から、継続した医療的ケアと福祉的ケアを包含した生活支援を進めるよう求められ、精神科病院に入院している人びとの高齢化が進行しているため、居住の場の整備では、介護ニーズをも想定した支援の準備も求められている。その一方、GHの支援形態と職員の専門性の多様化が進み、そうした状況下でGH入居者の医療・福祉・介護等に係る支援ニーズを包括的に評価し、適切な支援計画へと反映させる標準化された評価指標の開発を試みるという研究である。

本研究は、居住の場であるGHの支援に焦点化した評価ツールの開発であり、地域生活の維持や居住の安定に向けた支援を進めるため、生活全体を包括的かつ中立的に捉える国際生活機能分類：International Classification of Functioning, Disability and Health（以下、ICF）の概念を踏まえ、その実践的応用を「評価支援尺度」の開発による具体化が主たる目的になっている。

本論文の構成と内容は、序章で問題の所在と研究目的および研究方法を示し、第1章のGHで暮らす精神障害者への支援で英米における精神障害者への地域ケアとGHの展開を先行研究で整理しつつ、地域生活支援システムの対象者とそのニーズを確認して居住プログラムにおける精神障害者GHの実践モデルを紹介し、我が国における精神障害者GHの動向と支援の課題を整理している。第2章では、精神障害者の支援にかかわる評価として、精神障害者の支援にかかわる評価に関する研究の動向を先行研究によって確認し、居住の場での生活支援にかかわる評価尺度の特性と課題とともに、ICFを応用した評価やソーシャルワークにおける評価指標とツールおよびリスクアセスメントの視座による評価の研究動向を検証し、ソーシャルワークにおけるアセスメントとリスクアセスメントの概念比較で考察を加えている。第3章で精神障害者GHにおける評価支援尺度の開発のために、ICFの「活動・参加」の分類項目を援用して評価尺度試案のパイロットスタディを実施し、統計的調査ではデータの均質性を図るべく、GH支援者で組織化された東京都精神障害者共同ホーム連絡会と神奈川県精神障害者地域生活支援団体連合会に加盟する全GHの216か所（648名の世話人）を対象にして調査票を留置き・郵送にて配布・回収し、61事業所より148名の回答（回収率22.8％）を得ている。その調査から統計的分析結果を検証しながら考察を加え、精神障害者GHの支援者である調査対象者および利用者の特性の確認とともに、開発した評価支援尺度の信頼性と妥当性の検証を行い、その中核となる生活機能領域の支援評価に影響を及ぼす因子の相関性を導き出し、それらの分析結果を事例研究によって支援ツールの検証結果を論証して

いる。終章では、本研究で開発した尺度の信頼性と一定程度の妥当性を得られたという結論とともに、今後に残された研究課題を確認している。

以上のようにGHにおける生活機能領域の相関性を描き出すことで、そこでの支援の内容や効果等を検証するための新たな評価ツールと活用への可能性について論じた研究論文である。

審査結果の要旨

本課程博士論文は、精神障害者GHの利用者を支援するための評価ツールを開発するという基礎的な研究であり、そこでの支援評価を的確に実施できるよう試みた研究成果である。

当該論文の予備審査から口述試問を経た公開審査において副査である中村 敬客員教授（本専攻）と外部副査の田中英樹教授（早稲田大学）および主査の石川到覚教授（本専攻）が一致して「合格」と判定した。

本論文の概評は、北欧や英仏などのヨーロッパ諸国におけるノーマライゼーションやインクルージョンなどの福祉思想による政策展開により、障がい者や高齢者などの継続的なケアを必要とする人びとが大規模な病院や施設から地域生活へと移行する「脱施設化」の動向を整理しつつ、その中核を担ったGH実践の果たした役割を広範な先行研究によって検討した点が評価され、GHの有効性や実績を踏まえ、我が国において積極的な施策導入が進められていても、小規模で地域に開放されて家庭的に運営されているが故に、GHの居住支援を導入した領域においては、多くの困難例が顕在化している状況も、我が国の先行研究によって詳細に検証した点を評価できる。その先行研究を通じて精神に障がいのある人の生活機能や支援ニーズを測定する評価尺度が精神医学・精神看護学等で多く開発されていても、GHにおける生活支援に焦点化したものは、諸外国を含めて未だ開発されておらず、ICFを精神保健福祉の実践に応用するための評価指標の開発では、デイケアのプログラム評価や看護ケアのための評価などに係るものが散見されても、GHに焦点化した応用的な研究はないことなどGH研究の到達点を明らかにしたという先行研究に対する高い評価であった。

そうした中で尺度ツールの開発にとって欠かせない外的基準との比較による交差妥当性の検証ができないことから、豊富な支援経験を要する専門職者との協働によるパイロットスタディを重ねることで評価尺度の信頼性や妥当性を図るという丹念な検証手順を踏んでいる。そして、本評価ツールの活用では、89項目で構成する評価支援尺度試案を統計量の分析と尺度の構成概念妥当性を検証する因子分析の結果で選出された38項目の中では、15項目の構成による「日常生活機能」、8項目の構成による「セルフケア機能」、8項目の構成による「対人関係機能」、7項目の構成による「社会参加機能」という生活機能4領域を評価する相関関係を見出している点が新たな分析結果として注目に値する。そうした4領域がGHにおける支援にとって注視すべき機能であることを導き出した点では、GH入居者の支援をセルフケア機能に働きかけることで居住生活の維持、安定、対人関係の広がりや社会参加の促進へとつながり、入居者の個別支援計画を作成するためのアセスメントやモニタリングにとって重要な要点になることを示唆している。

よって、精神に障がいのある人びとの地域移行が困難を極めている我が国の状況下においては、多様化しているGHの居住支援に焦点を当て、その支援における生活機能についてICFを具体化したツール開発の挑戦的な研究成果として大いに評価できる。こうした評価ツールの開発的な研究は、普遍的に共通する支援指標を示すことで、各GHにおける居住支援のローカルなモデルをも創出させるための基礎的な研究としても意義深い。だが、GHにおける支援で共通する評価スケールを開発しても、GHの構成要素によっては差が生じる場合があり、これらの差は更に検証を重ねながら、GHの支援形態に応じた評価支援ツールを再検討すべき課題も残されている。

本研究の研究成果は、精神に障がいのある人びとの居住支援システムやプログラム開発を進める基礎的な研究に留まらず、どのような居住喪失の状態にある人びとへも援用できる可能性を有している。先ずは、精神に障がいのある人のGH支援に焦点化されているが、この支援評価ツールが信頼性、妥当性、利便性などの検証をさらに積み上げれば、他の領域への汎用性が期待でき、今後、多様なGHの支援モデルの開発にも貢献する可能性を持った研究としても期待できる。